

野火が維持した 特異な景観



小清水原生花園は、網走市より東南に約15 kmの位置にあり、北はオホツク海に面し南は瀧沸湖に挟まれた、東西に延びる砂丘列の上に発達した延長約8 kmに及ぶ海岸草原で、面積は約275 ha、幅の広いところで200 mほどである。

海浜ではハマヒルガオ、ハマニガナ、ハマニンニク、コウボウムギ、砂丘ではハマナス、エゾスカシユリ、エゾキスゲ、クロユリ、ヒメイズイ、エゾカワラマツバ、ハマフウロなど多くの種類が春から秋にかけて、代わる代わる咲き続けている。

網走・釧路間を結ぶ釧網本線が草原の中を国道と併行して走り、背後に瀧沸湖、東側には斜里岳をはじめとする知床連山がみられるなど、優れた背景をもつ。

また、瀧沸湖畔は、湖とともに広々とした馬の放牧がみられ、湿性の草原にはヒオウギアヤメ、センダイハギなどの群落もある。

1951（昭和26）年に北海道名勝に、また1958（昭和33）年には国定公園に指定された。「原生花園」という呼び名はきわめて優れたキャッチコピーだが、植物学的なものではない。本来は「海岸草原」が正しい。旅行雑誌『旅』の名編集長と言われた戸塚文子さんが最初に命名したものだといわれている。

「原生花園」は放牧が行われたり、海岸林が伐採などで樹林が失われて草原が発達したものが多

い。小清水原生花園も放牧の影響を強く受けていたほか、蒸気機関車の時代、春先に煙突から飛んだ火の粉で野火を繰り返して、海岸草原の維持に役立ったらしい。放牧に伴って持ち込まれた牧草の枯れ草が焼き払われ、多くの自然の草の発達が促されたのである。その後、ディーゼル機関車に変わったため野火がなくなり、牧草が繁茂し、相対的に自然の花が減ることとなった。現在、計画的な野焼きや帰化植物の除去が毎年行われ、この特異な景観の維持に努めている。

原生花園のほぼ中央には、インフォメーションセンターHanaがある。隣には釧網本線原生花園駅があり、駅から天覧ヶ丘、遊歩道と続いている。原生花園の花が見頃を迎える6月下旬から7月下旬まで、地元観光ボランティアガイド協議会が天覧ヶ丘付近に常駐し、園地内の花や周囲の様子を無料で案内している。



●お問い合わせ先
小清水町産業課商工観光係
Tel. 0152-62-2311
小清水原生花園
インフォメーションセンターHana
Tel. 0152-63-4188